



不安や苦労が多かった避難生活。 家族と一緒に、少しずつ安心を取り戻す。

共生型福祉施設 おり おん 織音（旧事業所名 ころろ・さをり）

- ◎利用者：愛さん（女性／当時20歳・知的障害）
- ◎職員：熊井さん（会話の補助としてお話に参加していただきました）



— 製造しているさをり織り製品 —



— 利用者の愛さん —

3.11
当日

全員が無事だった施設から
自宅へ、大切な「宝物」も一緒に
避難。

その日愛さんは、いつものように石巻市内の「織音」に通い、調理実習でシチューを作っている時に大地震に遭いました。海に近かった「織音」の建物は、大きな津波に飲み込まれてしまいます。しかし利用者や職員全員で建物の上階に避難し、みんな無事に乗り切ることができました。

愛さんには、とても大切な「宝物」があります。お気に入りのマンガ本やぬいぐるみなどが入った、大きくて中身の詰まったバッグです。愛さんの家族も、このバッグが大切なことをよく知っています。波が引いた後、がれきをかき分けて迎えに来てくれたお父さんは、「愛にはこれが必要だ」といって、宝物のバッグを置き去りにせず、愛さんと一緒に自宅に持って帰りました。

避難後

余震が絶えず眠れない日々。
福祉避難所への移動で生活に
安心が戻る。

愛さんの自宅は津波で一階が被害に遭い、余震で家が壊れはしないかと不安を抱いていました。そのため、昼は家で片付けをし、夜は道の駅の駐車場で車中泊をするという日々が続きました。「織音」の職員がその状況を知り、市内の福祉避難所に打診。すぐに部屋をひとつ借りることができ、家族で移ることができました。愛さんは、この時ようやく少し安心できたと

いいます。さらにその後、福祉仮設住宅に入居、2016年2月、復興住宅に引っ越しすることになりました。

仮設
住宅

地域コミュニティが分断された
中で、家族の存在が暮らしの
希望に。

仮設住宅での暮らしは、良かったこと、大変だったこと、さまざまなことがありました。大変だったのは、9畳程度のワンルームに家族4人で暮らさなければならないことでした。かつての自宅では、個室を持っていた愛さんです。プライベートのない暮らしはとても窮屈で、苦労が絶えなかったといいます。また、隣には「織音」利用者の家族が住んでいましたが、それ以外に知り合いがおらず、仮設住宅のコミュニティに溶け込みにくい状況がありました。

そんな中で状況を好転させてくれたのは、お父さんが仮設住宅の管理人になったことです。身近な場所で働くお父さんの存在が、愛さんと家族が安心して暮らすための大きな心のよりどころとなりました。

お父さんのおかげもあって、愛さんは仮設住宅の集会所で行われるイベントにも参加するようになりました。特にハンドマッサージのイベントは、香りが心地よく、気持ちよくて大好きでした。また、清掃やごみ拾いの手伝いなど、屋外に出るための行事もあり、外の空気を吸って気分転換できる機会も設けられていました。

現在は仮設住宅暮らしを終え、新居から「織音」に通う愛さん。作業のリーダー的存在として力を発揮しています。